

# 知識の素

霊界編

なんでん屋



知識の素

霊界編



あくまで経験した体験からなので、推測の域だと思えます。  
多少なり経験した人なら、ほぼ同じ考え方かなと・・・

## 1、死んだらどうなる

皆、眠った状態。

誰もが夢を見ている。

悪夢もあれば、幸せな夢もある。

目覚める事がないので、夢は持続したまま。

生きている時は、毎日夢がリセット状態。

だから、悪夢は続かない。

死んだら、悪夢ばかり見る人、地獄行き。

幸せな夢ばかりなら、天国。

普通は、日常に追われる夢ばかり、生きているときと全く同じ。死んでも毎日働いて、お金をもうけている。

そう、すべてが夢なのです。

そんな馬鹿な、そんなはずはないと思うでしょう。

しかし、いろんな霊界の話をまとめると、そうなるのです。

### 体は間借り

生き物は、自分という核を持っている。

決して、他者と共有できるものではない。

同じ人生は歩まない。

だが、体は同じような人生を歩んでいるように見える。

でもこころは、決して同じではない。

一卵性双生児のような生き方ではない。

人生のコピーはできない。

## こころは自由

他人が何を考えようが、自分が何を考えようがルールという文字はない。

だから人に教えても、その通りにはやってくれない。

こころを縛られる事は、決して許さない。

こころは自由である。

だからといって、何をしてても許されるわけではない。

世の中にルールは存在する。

ルールの中で、自由選択の意志決定がある。

なぜみんな同じ事をしないのか。

こころは自由だからである。

**こころはエネルギー体**

こころが同じなら、同じ人間がコピーできる。

顔は違えど、体はほとんど同じ構造。

なら、同じ人間がいてもいいじゃないかと思う。

でも同じ人間は決していない。

皆違う。

なら、こころだけは別物と考える。

こころは物体ではない。

ならば、こころはエネルギー体と考えるしかない。

三者三様があってしかるべき。

使い回しもできない。

こころとは、なんなんだ。

**こころは永遠**

エネルギー体なら死ぬ事はない。

体は、朽ち果てるかもしれない。

体はいずれ死ぬ。

でもエネルギー体は死なない。

そのエネルギー体を「**靈魂**」と呼ぶのではないか。

なら、エネルギー体は永遠に存在するのではなからうか。

エネルギー体が死ぬとはどういうときか。

それは、大きなエネルギー体に食われるとき。

食われなければ、永遠に存在する。

### 病気で死んだら

病気で死ぬと、体の重みや痛みから解放される。

しかし、体はもう自由に動かせなくなる。

いや、死んでいるのでそういう感覚はないのであるが、こころは解放される。

世の中に、死んだら自分に会いにきたという話は、無数にある。

これらの事実があるのに、一部の頭のいい人はすべて否定してきた。

自分の地位を脅かされるのが嫌いなのだろう。



死んで体験すると、後悔すると聞く。

みんな、こういう世界があったのだと、そのとき驚くだろう。死ねばわかる。

そう意味では、楽しみかもしれない。

自殺したら

自殺はいけません。

恨みつらみ、後悔、怒り、そういう負のエネルギーを持ったまま死ぬのである。死んで楽になれるだろうか。

その感情を背負ったまま、エネルギー体になるのである。

それは、怨霊、呪縛そのものではないだろうか。

自殺の名所には行くな。

そういわれる人も多いだろう。

いわゆる負のエネルギーに取り憑かれるわけである。

取り憑かれれば、同じ道を歩むかもしれない。

あなたも、その負のエネルギーの仲間になるだろう。

永遠に人を恨んだまま、何万年以上も存在し続けるのである。

天国には絶対行けません。

### 自然死ならば

世の中に感謝したまま、最後のときにも負のエネルギーはない。

負のエネルギーがなければ、前向きに死んでいける。

そうなれば、死んで天国に行けるはず。

そういう場所はないと思うが、天国にいる状態を維持できるのである。

それを天国と言っているのだろう。

ある人は、楽園を想像するだろう。

好きな事ができる世界に行けるだろう。

そういう天国を目指して、日々生きるのが、生きている人間の使命かもしれない。

## 恨んで死ねば

あなたは、怨霊になる。

個々の怨霊も合体すれば、巨大な怨霊の固まりになる。

そういう怨霊体は、この世にいっぱい存在する。

そして同じ仲間を増やすために、人々に悪さを仕掛ける。

人をどうにかしたいエネルギー体なので、休まる事はない。

永遠に同じ事を繰り返すだけ。

助け舟は、残してきた家族と知り合いだけである。

生前嫌われていたのなら、助け舟にならない。

孫の孫、その下の孫、に頼むしかない。

そういう靈魂は、いっっぱい、いっぱいいます。

怨霊を指摘しても、所詮はこもの。

使いつ走りをさせられるだけで、大物にはなれません。

大物は、怨霊の集合体です。

そのなかの一匹にすぎないのです。

生きているうちに成すべき事

死ぬまでに成し遂げる事があるのではないか。

けっしてあきらめることはない。

金の問題ではない。

金はその世に持っていけはしない。

あなたが人生の中で、なりたかったものは何か。

金持ちでも不幸者はいる。

死ぬまでに頂点に立つ。

それができれば、人生悔いはない。

その途中過程でもいい。

それが満足できていれば、死んで天国。

## 2. 生まれ変わりはあるか？

あるといえばある。

ないといえはない。

全記憶ではなくて、一部の記憶ならあります。

同じ人が死ぬまでのすべての記憶を持って、生まれ変わることはありません。

もしそうなら、裏の世界と表の世界を知って、生きることができると。

そんな人は今まで、現存したことがない。

生きていたらすごい人だと思います。

ルパン三世のマモーみたい。

そんな人間は、あり得ないですね。

だから、一部の記憶だけなんです。

では、生まれ変わるかということ、そうでもない。

死んだ人が念を送っている可能性が強い。

そうすると、一部の記憶を持っていることの証明になる。

本人が自分の記憶と勘違いしている状況なのである。

いわゆる霊界通信をしていることになる。

霊界通信ができる人は、世の中にいっぱいいます。

上から下まで。

霊界通信も、その中に自分の意見が混じっています。

霊界通信に慣れた人なら、なおさらです。

霊界の言葉を書いている人は、筋違いのことを書いている場合があります。

最初の言葉は、霊界から。

そのあとは、自分を誇示したいために嘘を言っています。

それを本人はわかっていないのです。

ずっと霊界からの声だと思っている。

ここで言いましょう。

霊界は必要最低限の言葉しか送ってきません。

ほとんどが忠告です。

あとは自分で考えるというスタンスです。

だから、語る内容が長い場合は、嘘ばっかりです。

これが霊能者の実態です。

人気があるのは、人柄が良いから。

突拍子のない間違っただことを言わないから。

ムキになって言わないから信頼できるのです。



以上が、私の分析です。

七つのチャクラのひとつずつに靈魂が存在する。

七つの人格体である。

### 3. 大川隆法の世界より

大川隆法の本を初めて買ってみた。

「靈的世界のほんとうの話」をブックオフで見つけたので、興味本位から購入した。

結論は、自分の世界と大川隆法の世界はほぼ同じだったことがわかった。

自分としては、安心できた。

同じ考え方の人がこの世にいると思うと、親近感が出ます。

霊を特別な存在として扱うわけでなく、ひととして判断する。そういうところは共感できます。

ただ、自分の世界と違うところは要所にあります。

生まれ変わりはあるとして、話を進めていること。

生まれ変わりがあるとすれば、強大な力で術を使って何らかをしなければいけない。

神は、雑多にいと説いているなら強大な力は存在しません。

それは、幻想に過ぎません。

霊の方もよくわかっていないのが実情です。

信憑性が高いのは、霊も人間ですから、ウソをいつている可能性があります。よかれと思いうそをつく、あれです。

そういうほうが、人間は安心できます。

真意のほどはわかりませんが、私の世界とは違います。

さすが、霊界のメッセンジャーです。

大川隆法は、霊の名前を挙げますが、私は誰でもいいのです。

それが、真実であるならば・・・

## わかってきた霊界の世界

いろいろわかってきたことについて触れたい。

人が死んで霊界に行っても、そこが霊界だとは認識していないようだ。

天国のような場所があるわけではない。

しかし、望めば出てくるような世界らしい。

通常は暗い世界であって、当然と言えば当然なのだが、死んだ人の目玉はない。見えるはずもない。

しかし、生きている人も目をつむれば素晴らしい世界が見えるし、夢を見ているときも、夢でその光景を見ていたはずだ。

生きているときはその目でいろんな光景を見て憶えている。

そして死んでも、その光景は思い出のように目に浮かぶといった感じだろう。

霊界の世界では、自由に話ができるらしいのだが、できないときもあるらしい。その理由はわからないし、教えてもらえない。

また、靈界で話ができると同時に、地上界との会話も成り立っている。いわゆる守護靈のような感じだが、指導などを受け持ってくれている。

地上の人間は、その話を信じてくれている人もいれば、気づかない人もいる。その気づかない人にどうしたら気づいてもらえるかが、靈界人の悩みであるという。

地上人の中では、話を信じる人もいれば、信じない人もいるわけで、そこがやっかいなところらしい。

また、話してみると、先祖達の声と言うよりもテレパシーで生きている人と話しているような錯覚を覚える。

そこは、受け取る本人の理解度といったところだろう。